

映像の中で背中が表現する

愛・別れ・孤独

高沢 瑛一

フランスの女優で、シモーヌ・シニョレという人がいる。美人ではないが、人生の陰影をみごとに表現する演技力で、シャンソン歌手のイブ・モンタン夫人として知られている。この人を思い出すたびに、私の頭には、彼女のがっしりした幅広い背中のイメージが浮かんでくるのである。

彼女とローレンス・ハーベイで共演したイギリス映画「年上の女」(一九五九年)。野望に燃える青年と、年上の人妻との間にかわされる明日のない愛。逢いびきの後で、青年が見送る中、背中を見せて舗道を歩み去って行く人妻。彼女は、背中に青年のまなざしを感じながらも、ふり返るうとはしない。そして、前を向いたまま手をふって、背後にいる青年に別れを告げる。カメラは、シモーヌ・シニョレの後姿に向けられたまま、彼女が背中表現する情感をとらえたのであった。

この愛がままならないということを知りながら愛さずにはいられない。やがて、別れは必ずやってくる。愛する女の哀

しみと切なさ。シモーヌ・シニョレは、背中を見せて投げやりに手をふってみせながら、女のせい一杯の気持ちをあらわしたのであった。この時のシニョレほどに巧みな背中の演技ができる俳優には、かつてお目にかかったことはない。

別れの演技といえば「カサブランカ」(四三年)のラスト・シーンも同じことだ。霧にけむる夜の空港で、夫とともに飛行機に向っていくイングリッド・バーグマンの後姿を、じっと見送るレインコト姿のハンフリー・ボガード。この場面では、登場人物すべてが背中の演技を見せてくれた。夜霧の中で別れにすすり泣いているようなバーグマンの後姿、絶ち切れぬ思いを背中いっぱい表現していたボギー。忘れられぬ名場面だ。

愛と別れ、そして孤独。イタリアのミケランジェロ・アントニオーニ監督も、「情事」(五九年)で印象的な後姿の場面を残した。失踪した恋人をさがす男と、恋人の女友たち。男は、恋人をさがすうちに、その女友たちと愛し合う仲間になっ

てしまう。冷たい風景に取り囲まれながらベンチに坐って涙を流す男。男の頭に手をやりながら茫然とたたずむ女友だち。カメラは、その二人の背中をじっと凝視しながら、愛というもののあいまいさ、表情のない不毛の愛を描いたのであった。

太陽に向かって歩み去る男と女の背中の中のシルエット。そこには自由と喜びが満ちあふれている。これは、チャールズ・チャップリンの「モダン・タイムス」(三八年)の有名なラスト・シーンだ。機械工をクビになりルンペンになってしまったチャップリン。彼は、波止場で食物を盗んでいた娘と知りあい、やがて感化院の手から彼女を救い出して、二人手を取りあつて旅に出ていく。「元氣を出しな。明日という日があるじゃないか」。チャップリンの背中には名セリフを残して、見る者に感動と生きる勇氣を与えたのである。

私たちが、ごく身近で背中の中のイメージを思い浮かべる時、それは暖かくて少しきしゃやかな母の背中であり、がっしりしていて、ちょっと孤独な父の背中である。

山田洋次監督の「家族」(七〇年)で、主演の倍賞千恵子は、背中に幼い女の子を背負いながら長崎から北海道の開拓村へ向かうしつかり者のお母さんを演じた。一家五人が、旅

の途中でバラバラにならぬようにと、大黒柱となって夫や子どもをばげます若い母。東京で、背負っていた女の子が病いで死んだ時には、さすがのしつかり者も絶望のどん底につき落とされた。母の背中のぬくもりが子どもを包みこむ愛情は、限りなく深い。

ちょっと変わったところでは、黒沢明監督の「用心棒」(六一一年)などで、三船敏郎が見せた背中の中の演技は、実に何ともいえず良かった。着流しの肩をいからして宿場町をかつ歩する浪人、桑畑三十郎。彼の背中には、放浪の果てにしみついた孤独と男の意地が、深い年輪となって刻みこまれているようだった。

かつて東大生が「泣いてくれるな、おっ母さん、背中の中のちやうが泣いている」という五月祭のポスターを作つて話題を呼んだ。この原型が、高倉健主演の任侠映画「昭和残侠传」シリーズ。その主題歌の中で、背中はさまざまな表現をされている。「背中で吠えてる唐獅子牡丹」「背中で泣いてる唐獅子牡丹」「背中で呼んでる唐獅子牡丹」……。こうなると背中は、顔以上にさまざまな表情に富んでるとさえ言えるだろう。

(映画評論家)